研究ノート

イラン、デーラマン地域における鉄器時代 IV 期から パルティア期にかけての土器編年

有松 唯

Pottery Chronology from the Iron Age IV to the Parthian Period in the Dailaman Distinct, Iran

Yui ARIMATSU

イラン北部デーラマン地域の墓地遺跡から出土する鉄器時代 IV 期からパルティア期にかけての土器は地域性が高く、考古学的時期区分への位置付けが困難だった。本稿では未報告資料を加え、墓壙内での共伴関係、他地域との比較、放射性炭素年代にもとづいて同地域出土副葬土器の再整理をおこなった。その結果副葬土器全般を従来よりも細分すると同時に、いくつかの墓壙について新たな区分と編年案を提示することができた。

キーワード：イラン鉄器時代、副葬土器、アケメネス朝ペルシャ、セレウコス朝シリア、パルティア

Pottery from Iron Age cemeteries in the Dailaman distinct is very unique, and therefore its chronological position is difficult to determine. This paper re-examines funeral pottery from Iron Age cemeteries in this area, including unpublished material and based on co-existence in tombes, comparaison with other area, radiocarbon dating. As a result, it was possible to further subdivide funeral pottery on the whole and offer new divisions and chronological detail about some tombs.

Key-words: The Iron Age of Iran, funeral pottery, Achaemenid Empire, Seleucid Empire, Parthia

Ⅰ．はじめに

現在のイラン・イスラム共和国にあたる地域は紀元前 6 世紀以降、アケメネス朝ペルシャ（前 550～330 年）、セレウコス朝シリア（前 330～150 年）、次いでパルティア（前 243～後 224 年）の統治下に入ったとされている。これら諸勢力は文献資料のうえからはその起源や性格からして大きく異なっていたことが知られているものの、相互の物質文化を明確に区分し得ない場合が多かった。こうした歴史的区分を背景に物質文化の通時的変化を検討するといった観点からの研究もまた、少数であったといえよう。

イラン北西部に位置するカスピ海南西岸域（図 1、2）も例外ではない。この地域の土器編年は別の機会に発表したが（有松 2005）、該期については不十分な知見にもとづかざるをえなかった。本稿ではアケメネス朝ペルシャ並行期以降パルティア時代にかけての土器編年の精査と、それにもとづく展望についてあらためて述べたいと思う。

Ⅱ．問題提起と本稿の目的

1．イラン鉄器時代の時期区分と物質文化との対応関係

アケメネス朝ペルシャ成立からパルティア期にかけての時期に言及する際、イラン考古学ではアケメネス朝期やセレウコス朝期に代わって鉄器時代 IV 期（Iron Age IV）あるいはポスト・アケメネス朝期（Post-Achemenid Period）という呼称がしばしば用いられてきた。

ポスト・アケメネス朝期はアケメネス朝滅亡以降からパルティア期にかけての時期を指す。この場合、セレウコス朝期のみを指すのか、パルティア期も含むのかという判断すら行われないことも多い。その背景としては「広義のヘレニズム期はパルティアやバクトリアまで含む概念と考えられる」（足立 2007）こと、さらに当該期の土器は非常に地域性に富むこともあり、アケメネス朝期以降の土器について「「セレウコス朝期」、「パルティア期」あるいは「エリュマイオス朝期」の土器として同定することは困難」（足立 2007）なことによる。どの物質文化の総体がセレウコス朝自体のものか判断することが困難だったため、それに並行する時期についてポスト・アケメネス朝期という呼称があえて用いられてきた。ただ実質的にはセレウコス朝並行期を意図して用いられる場合もあり、そうした場合にはセレウコス朝期をどうとらえるかによってポスト・アケメネス朝期の時期設定は変化する。

西アジア考古学　第 11 号　2010 年　89-100 頁
Ⓒ 日本西アジア考古学会

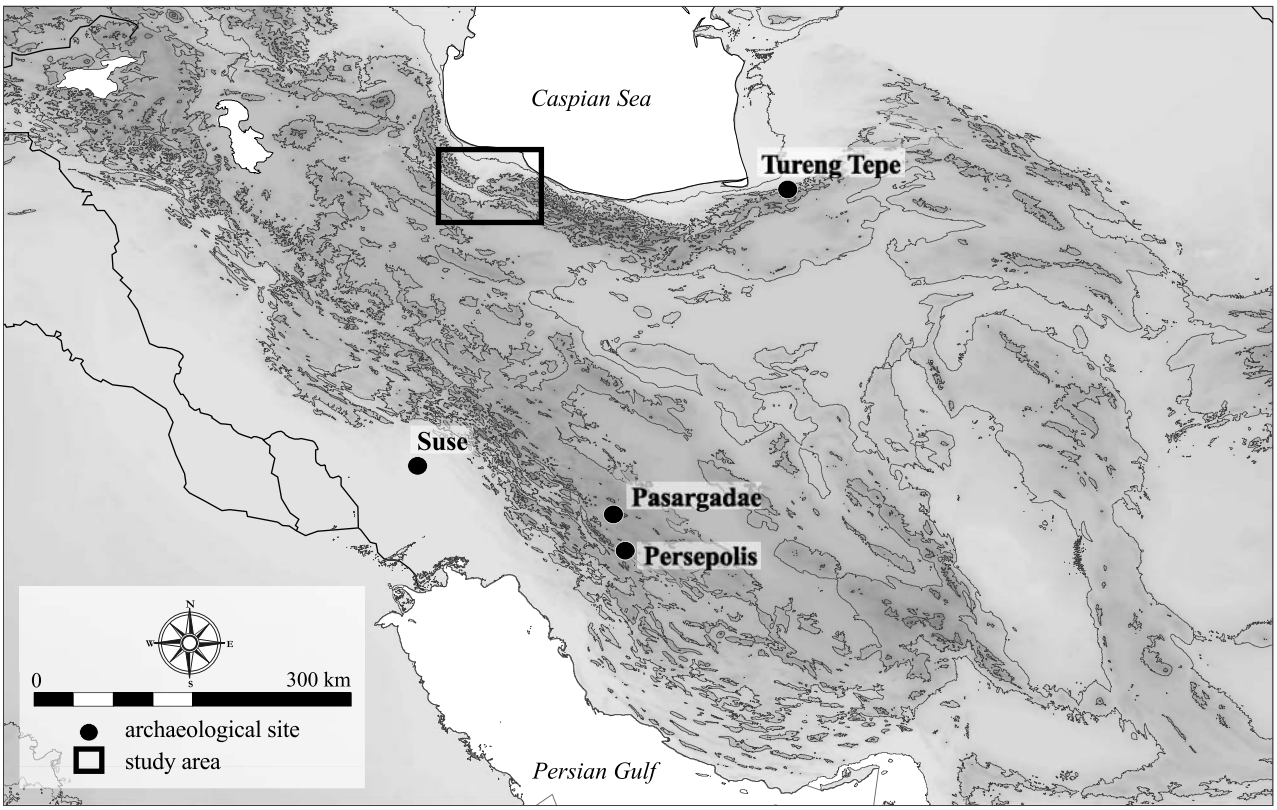


図 1　本稿対象地域と関連諸遺跡

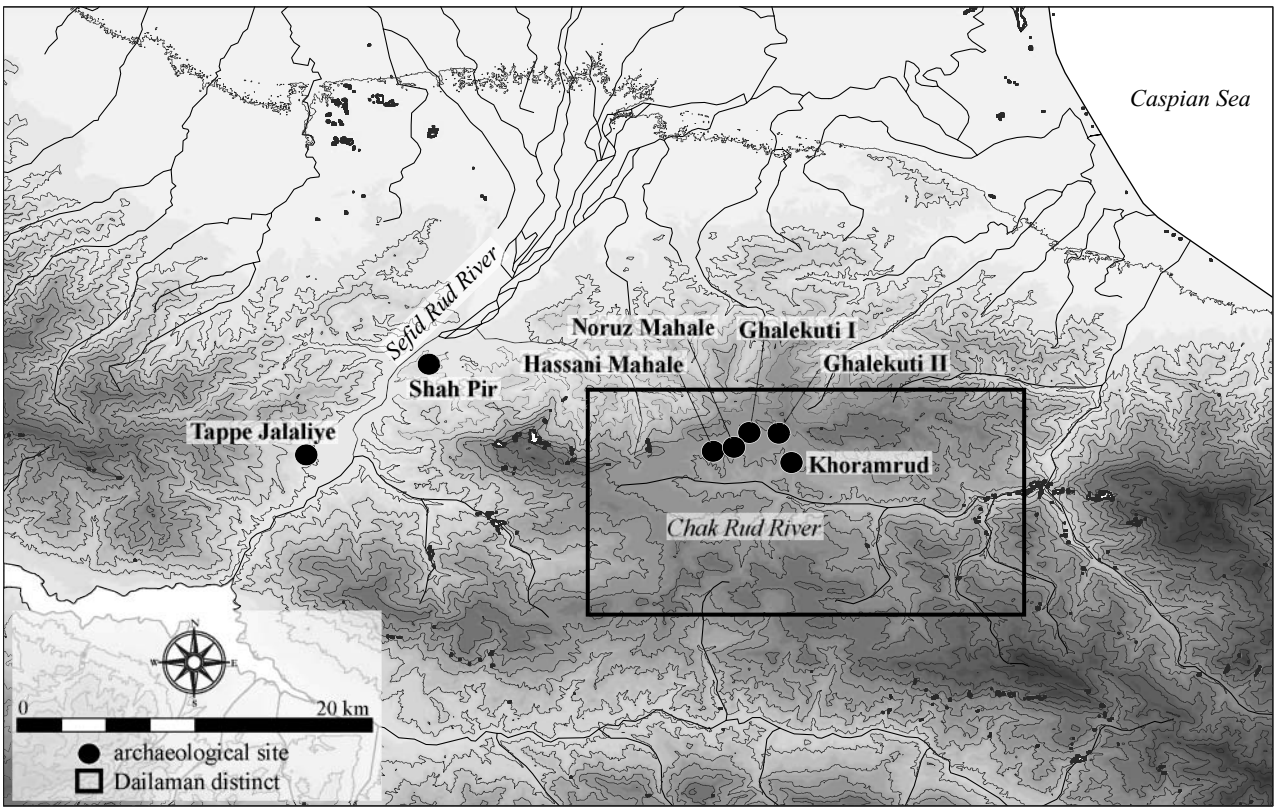


図 2　カスピ海南西岸域における鉄器時代 IV 期からパルティア期にかけての主要遺跡とデーラマン地域

例えばE. ハーリンク（Haerinck）は「ポスト・アケメネス朝期」を約 80 年間とやや短く設定している。前 3 世紀後半にはすでに北東イランでパルティアが出現していると解釈したのにもとづいて前 250 年から後 225 年頃を「パルティア期」ととらえ、前 330 年から前 250 年頃までの短い期間を「ポスト・アケメネス朝期」としたわけである（Haerinck 1983: 4）。D. ストローナック（Stronach）はパサルガダエ（Pasargadae）の発掘に伴い、前 280 年から前 180 年頃までを「ポスト・アケメネス朝期」としている（Haerinck 1983: 233; Stronach 1978: 155-156, 183-185）。同遺跡から出土した碑文から、この遺跡を含むファールス（Fars）地方が当該期にセレウコス朝の支配下にあったと解釈したことによるのだろう。

鉄器時代 IV 期はアケメネス朝期以降（多くの場合、アケメネス朝期後半相当）、パルティア期以前の期間を指す（Boucharlat 2005: 270-271）。アケメネス朝期、セレウコス朝期に代わりこの時期区分を用いるのは上記ポスト・アケメネス朝期を用いるのと同様の理由による。イランでは考古学的にアケメネス朝期とセレウコス朝期を区分し難い場合が多い。仮にこの時期に相当する物質文化が区分できたとしても、そのまとまりとセレウコス朝あるいはアケメネス朝という政治勢力との直接的対応関係を検証し得る場合は稀である。そこで、文化的まとまりではなく編年上の並行関係を示すにとどまるこの時期区分が考古学では多く用いられている。

2．研究抄史ーカスピ海南西岸域における鉄器時代 IV 期以降の土器編年ー（図 3）

カスピ海南西岸域の時期区分については主にデーラマン（Dailaman）地域の諸遺跡を中心に研究が行われてきた（図 2）。具体的にはデーラマンの発掘報告書、三宅俊成、堀晄、ハーリンク、谷一尚、足立拓朗の研究例がある。これらのうち鉄器時代 IV 期からパルティア期にかけての部分を中心に概観してみたい。

デーラマン地域では 1960 年代以降、東京大学イラク・イラン遺跡調査団（団長：江上波夫）によって一連の発掘調査が行われた。ガレクティ I 号丘（Ghalekuti I）、ガレクティ II 号丘（Ghalekuti II）、ラスルカン（Lasulkan）、ノールズ・マハレ（Noruz Mahale）、ホラムルード（Khoramrud）、ハッサニ・マハレ（Hassani Mahale）といった下記諸編年案の主軸となる遺跡のほとんどが、この調査で明らかになったものである。発掘報告書全 4 冊中アケメネス朝期以降についての記述をみるとまず、ガレクティ II 号丘をアケメネス朝期と年代付けている（曽野・深井編 1968: 98-102）。墓壙出土のガラス製品及び青銅製装飾品についての、ペルセポリス（Persepolis）、スサ（Susa）、あるいはパレスティナ出土品との類似が根拠となった。その他ハッサニ・マハレ、ノールズ・マハレ、ホ

<table>
<tr><th>遺跡</th><th>遺構名</th><th>三宅1976</th><th>Hori 1981</th><th>Haerinck 1983</th><th>Haerinck 1989</th><th>谷一1997</th><th>西秋他2006</th><th>足立2007</th><th>本稿編年試案</th></tr>
<tr><td rowspan="5">Ghalekuti Ⅰ</td><td>F5</td><td>アケメネス朝期</td><td rowspan="3">アケメネス朝期</td><td rowspan="6"></td><td rowspan="6">鉄器時代IV期（アケメネス朝並行期）</td><td rowspan="6">アケメネス朝期</td><td></td><td rowspan="6"></td><td></td></tr>
<tr><td>G9･S6</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">ポスト･アケメネス朝期</td><td rowspan="2">鉄器時代IV期</td></tr>
<tr><td>G9･S7</td></tr>
<tr><td>G9･S8</td><td rowspan="3">アケメネス朝期</td><td>アケメネス朝期</td><td>鉄器時代IV期</td></tr>
<tr><td>G9･S9</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>Ghalekuti Ⅱ</td><td>Tomb 2, 3, 5, 6</td><td>パルティア期（3～1 BC）</td><td>ポスト･アケメネス朝期</td><td>鉄器時代IV期</td></tr>
<tr><td rowspan="14">Noruz Mahale</td><td>AI</td><td></td><td rowspan="17">パルティア期（1～3 AD）</td><td rowspan="14">パルティア前期</td><td rowspan="17"></td><td rowspan="17"></td><td></td><td rowspan="14">パルティア中期～後期</td><td rowspan="17">パルティア期</td></tr>
<tr><td>AII</td><td>アケメネス朝期</td><td></td></tr>
<tr><td>BI</td><td rowspan="2">パルティア期</td><td rowspan="2">パルティア期</td></tr>
<tr><td>BII</td></tr>
<tr><td>BIII</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>BIV</td><td rowspan="9">パルティア期</td><td>パルティア期</td></tr>
<tr><td>BV</td><td></td></tr>
<tr><td>BVI</td><td>パルティア期</td></tr>
<tr><td>BVII</td><td></td></tr>
<tr><td>CI</td><td rowspan="2">パルティア期</td></tr>
<tr><td>DI</td></tr>
<tr><td>DII</td><td></td></tr>
<tr><td>DIII</td><td rowspan="3">パルティア期</td></tr>
<tr><td>DIV</td></tr>
<tr><td>EI</td><td></td></tr>
<tr><td>Khoramrud</td><td>各墓</td><td rowspan="2">パルティア期</td><td>パルティア後期</td><td>アケメネス朝期～セレウコス朝期</td></tr>
<tr><td>Hassani Mahale</td><td>各墓</td><td>1～3世紀</td><td>パルティア中期～後期</td></tr>
</table>

図 3　デーラマン地域に関する鉄器時代Ⅳ期からパルティア期にかけての編年案

ラムルードについてはガラス製品やファイアンス製品のエジプト、ドゥラ・ユーロポス（Dura Europos）との比較によって後 1 から 3 世紀と考えられている（曽野・深井編 1968: 98-102）。また、ホラムルードとノールズ・マハレについては出土したガラス製容器や鉄剣、青銅鏡に関してのハトラや北方騎馬民族文化との比較から同様の年代が呈された（江上ほか編 1966: 48-60）。

その後、この知見をもとにいくつかの編年と時期区分が提示されている。まず三宅俊成は同じくデーラマン地域出土土器について独自に分類と時期区分をおこなった（三宅 1976）。その結果ガレクティ I 号丘 9 号墓の一部と II 号丘及びノールズ・マハレの一部をアケメネス朝期とした。さらにノールズ・マハレ、ホラムルード、ハッサニ・マハレの大部分をパルティア期に位置付けている。時期比定の根拠は詳述されていないものの、金属器が青銅からバイメタル、鉄へと変遷すると仮定し、その多寡を基準にしたようだ。

堀晄（Hori 1981）はまさにアケメネス朝期とセレウコス朝期、パルティア期を対象として時期区分を行った。その際デーラマンに加え、近隣のハリメジャーン（Halimehjan）地域から出土した資料も対象として含めている。その結果、中央アジアやコーカサス方面との貴金属製品やガラス製品の比較から、ガレクティ I 号丘 F 区 5 号墓と G 区 9 号墓上層をアケメネス朝期、ガレクティ II 号丘をパルティア前半期、ノールズ・マハレ、ホラムルード、ハッサニ・マハレの各墓をパルティア後半期とした。

谷一尚はガラス製品の分析からガレクティ I 号丘 5 号墓と 9 号墓、ガレクティ II 号丘 3 号墓、ハッサニ・マハレ 4 号墓と 7 号墓について年代の検証を行った（谷一 1997）。これらの墓から出土したガラス製品について年代が明確になっている地域と比較し、編年を導いている。それによると、前者 3 墓壙は前 5 世紀前後のアケメネス期、ハッサニ・マハレ 4 号墓は後 1 世紀、ハッサニ・マハレ 7 号墓は後 3 世紀中葉から後葉と判断している（谷一 1997: 151-152）。

ハーリンクは上記「パルティア期」に加え「鉄器時代 IV 期」の抽出も併せて行っている（Haerinck 1989）。当該地域について唯一、この時期区分を当てはめた研究例として評価されよう。墓壙の構造、出土土器の器形、青銅製品、貴金属製品、ガラス製品についてスサやペルセポリス、メソポタミア方面との比較から、ガレクティ I 号丘 5 号墓と 9 号墓の一部、ガレクティ II 号丘の各墓を「鉄器時代 IV 期」と判断している。ただしここでの「鉄器時代 IV 期」はポスト・アケメネス朝期を含まず、あくまでアケメネス朝並行期を意味しているようだ（Haerinck 1989: 455-456）。

また近年、足立拓朗はタッペ・ジャラリィエ（Tappe Jalaliye）I 層も含めたギーラーン州のポスト・アケメネス朝期および「パルティア期」の編年試案を提示した（Adachi 2005; 足立 2003, 2007）。足立はその際ハーリンクの時期区分に拠っている。そのうえでタッペ・ジャラリィエ I 層からハーリンクによって提示された「パルティア前期」に典型的な土器が出土していることを指摘して、ジャラリィエ I 層をこの年代に位置付けた。そのうえでデーラマン地域についてはノールズ・マハレとハッサニ・マハレを「パルティア中期から後期」というより後の時期においている。

3．本稿の目的

このように概観してみると、ガレクティ I 号丘 G 区 8 号墓、9 号墓上層とガレクティ II 号丘を鉄器時代 IV 期以降とすることは一致しているといってよいだろう。しかし、そのなかでどの墓壙をアケメネス朝並行期とするのか、ポスト・アケメネス朝期（セレウコス朝並行期）とするのか、パルティア期とするのかといった具体的な点については多少の差異がみられる。また、ハッサニ・マハレ、ホラムルード、ノールズ・マハレの各墓はだいたいがパルティア期とされている（図 3）。しかし個々の墓壙をパルティア期のどこに位置付けるかは研究者間で統一されていない。筆者自身もかつてデーラマン地域の土器編年をおこなったが、鉄器時代 IV 期以降に関しては十全に細分することができなかった（有松 2005; 西秋ほか 2006）。そのことの背景には上記時期区分の問題もある。鉄器時代 IV 期以降の時期区分の定義が研究者間で異なっていたこと、加えてこの地域の鉄器時代 IV 期以降の土器は特に地域性が高く他地域との比較が困難なことから、土器編年も流動的且つ曖昧なものにならざるを得なかったと考えられる。

本稿ではデーラマン地域における鉄器時代 IV 期以降の土器編年の再検討をおこなう。その際新たな資料を加え、上記イラン他地域で広く用いられている考古学的時期区分への適応を試みたい。同時に鉄器時代 IV 期以降の副葬土器について細分したうえで再整理し、各時期の特徴を明確にしていきたい。

なお本稿ではポスト・アケメネス朝期という用語は上記パサルガダエ及びペルセポリス、あるいはスサ周辺域での「ポスト・アケメネス朝期」の定義に倣い、あくまでイラン南西部でのセレウコス朝期並行を示す時期区分として用いる。また上記パサルガダエのようにセレウコス朝の影響をうけている場合が明白であったり、報告者自身が「セレウコス朝」あるいは「セレウコス朝期」と明記している遺跡や資料についてはそれに倣って記述することにする。

Ⅲ．分析の対象と方法

1．対象地域（図 1、2）

本稿で対象とするのはイラン北部、カスピ海南西岸に位

置するデーラマン地域である。この地域は「プール・イ・ルード河の東のアセヤバールから、西ホルボン・ダーレエーの流域附近一帯の河谷地方」(深井・池田編 1971: 4) で、チャーク・ルード川を中心に盆地状地形を呈している（図２)。

ここでは上述したように東京大学イラク・イラン遺跡調査団が発掘調査を行っていて、上記編年案のほとんどがその成果をもとにしている。複数の遺跡にまたがるとはいえ対象時期を網羅し得る資料が出土していること、精緻な報告がなされていることによるのだろう。現時点でもカスピ海南西岸域におけるその稀少性にかわりはない。それは同時に、本稿の目的に最も適う地域ということにもなる。

２．分析方法

デーラマン地域で発掘調査がおこなわれたのは墓地遺跡に限られるため、編年は専ら副葬品としての土器を対象とすることになる。まずそうした土器を形態によって分類する。各分類について墓壙内での共伴関係から同時性を導き、土器群としてまとめた。さらに製作技術に関わる属性（主に胎土、色調、成形技法、器面調整）にも着目して分類し、同様に墓壙内での共伴関係を確認したうえで、器形から導いた土器群との対比を行う。

こうして抽出した土器群間の組成と型式、製作技術の比較から相対編年を設定した。そして最後に他地域出土土器との比較や放射性炭素年代にもとづいて各土器群の上記考古学的時期区分への比定を行う。

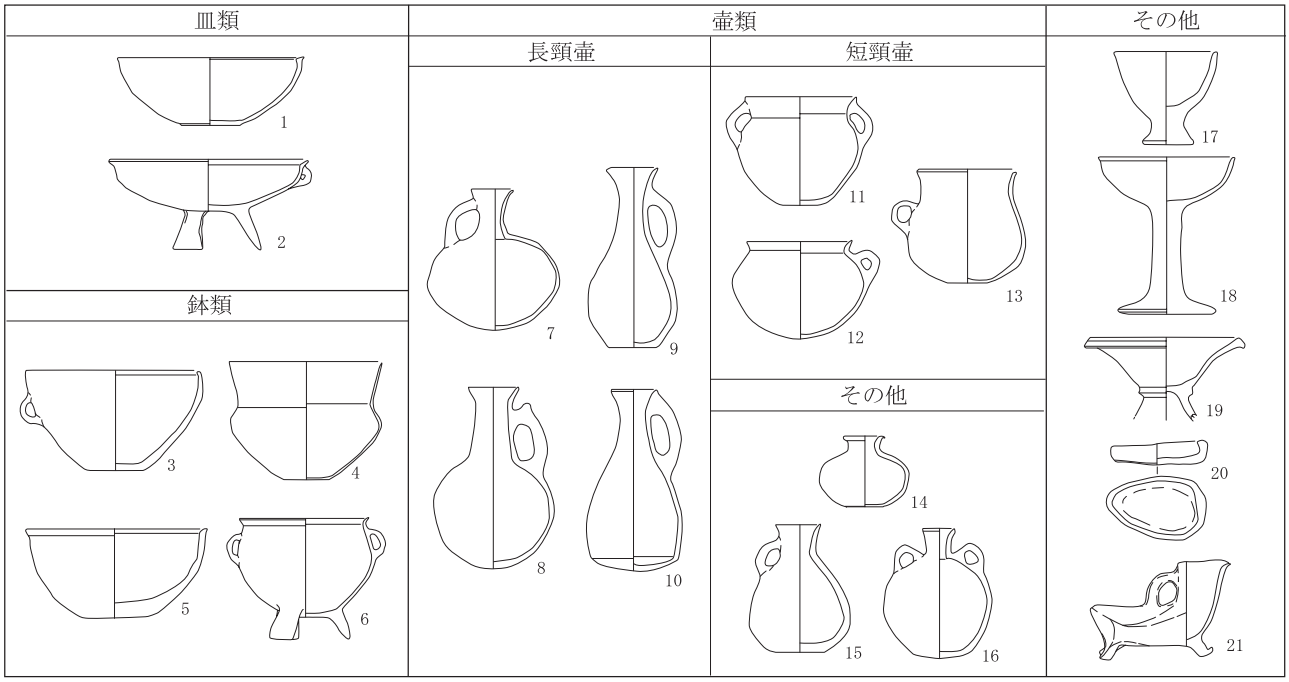
３．対象資料

対象資料は上記デーラマンの諸遺跡から出土した土器である。墓壙からの出土が明白で器形の判別が可能だった 91 点が主な分析対象となる。今回はそのうち、東京大学総合研究博物館所蔵の 46 点を実見することができた。そこには未報告資料も含まれる。製作技術の分析はこれら実見が可能だった資料について行った。器形については報告書の記載を参照のうえ、実見できなかった資料も合わせて対象とした。

Ⅳ．分析

１．器形の分類（図 4）

器形分類は本来ならば土器の機能にもとづいて判断すべきだが、今回対象とした資料は器形からはその機能を推測することが不可能なものが多い。また、上述したようにすべて副葬品として用いられていたため出土状況からも用途を判断することはできない。そこである程度数量的に把握しうるプロポーションで皿類、鉢類、壷類、埦類、その他の器形というように大別し、さらに口縁や底部などの細部の形態によって細分した。したがってここで用いた呼称は便宜的なものであり、必ずしもその機能を反映したものではない。



(8, 9, 17, 18：江上ほか編1966より一部改変；1, 2, 4-7, 10-16, 20, 21：曽野ほか編1968より一部改変；3：深井ほか編1971より一部改変)　（縮尺不同）

図 4　鉄器時代 IV 期からパルティア期にかけてのデーラマン地域出土副葬土器の器形分類

把手など附属部は分類の基準としなかったが、特徴的な知見が得られた場合には適宜言及する。また形象土器も対象として含めた。中空で容器状になっているため、土器と近似した用途を想定したことによる。

1）皿類

最大径が口径にあって、且つ口径が器高の倍以のものを皿類とした。口縁部の形態によって細分できる。

皿 1 類（図 4-1）：口唇部が外面あるいは内面に突出する。

皿 2 類（図 4-2）：口縁部が外反し、把手と三脚が付く。

2）鉢類

最大径は口径にあるものの口径が器高の倍以下のものを鉢類とした。胴部と口縁部の形態で細分した。

鉢 1 類（図 4-3）：やや大型で口縁部が内湾する。

鉢 2 類（図 4-4）：胴部中央付近に竜骨部を有するもの。

鉢 3 類（図 4-5）：口縁部が外反するもの。

鉢 4 類（図 4-6）：胴部が丸みを帯び、底部も丸底に近い。ほとんどに把手と三脚が付く点も特徴。脚は扁平なものと突起状のものがある。注口が付く場合もある。

3）壺類

短頸壺 1 類（図 4-7）：平底で口の大きく開いた壺。双把手がつく。

短頸壺 2 類（図 4-8）：1 類よりも小型で頸部がやや短い。丸底が多く、把手や注口の付く場合が多い。

短頸壺 3 類（図 4-9）：1 類と類似するが、胴部最大径が胴部下半にある。底部が狭く、やや小型。

長頸壺 1 類（図 4-10）：胴部と頸部の境が明瞭ではない。胴部は長楕円形で横長になる。すべてに把手がつく。

長頸壺 2 類（図 4-11）：胴部と頸部の境が不明瞭。胴部が球状を呈する点が 1 類と異なる。これにもすべてに把手が付く。

長頸壺 3 類（図 4-12）：2 類と類似するが胴部が縦長で洋梨形に近い。平底が主。

長頸壺 4 類（図 4-13）：全体的に 3 類と類似するプロポーション。底部が凸レンズ状を呈する点が特徴。

小型壺 1 類（図 4-14）：小型で 15cm に満たないもの。附属部はない。

小型壺 2 類（図 4-15）：口縁部が外反し、胴部が長楕円形を呈する。把手や注口が付く場合が多い。

偏壺（図 4-16）：胴部が扁平で双把手が付く。頸部には刻文が線状に周回する。

4）その他

高台付埦（図 4-17）：単純な埦形の坏部に短い脚が付く。高杯と比較すると小型。

高杯（図 4-18）：杯部は鉢 4 類に類似する。

フィッシュ・プレート（図 4-19）：小型の皿。口縁部が大きく折り返され、器壁が底部に向かって直線的にむかう点が特徴。

ランプ形土器（図 4-20）：全体的に扁平で非常に浅い容器。黒斑がともなうこともあり、ランプに近い用途を想定した。

形象土器（図 4-21）：鳥を模したような形態を呈する一方、中空で、容器としての機能が備わっていたと考えられる。

2．器形からみた土器群の抽出

上記器形分類の墓壙内での共伴関係について検証を行った（表 1）。その結果 3 つのまとまりがあると判断し、それぞれを A 群、B 群、C 群とした（図 5）。

1）A 群

ガレクティ I 号丘 G 区 9 号墓 6 号人骨と 7 号人骨、ガレクティ II 号丘 6 号墓にともなう。皿 1 類（図 5-1~2）と小型壺 2 類（図 5-3~4）が特徴的な器形。II 号丘 6 号墓では偏壺（図 5-5）も出土している。

2）B 群

ガレクティ II 号丘の、6 号墓以外の各墓壙でみられる組成。A 群とは小型壺が共通する一方、短頸壺および長頸壺を伴う点が異なる。これら 2 種のいずれかが、各墓壙に必ず副葬されている。特に特徴的なのは長頸壺 1 類（図 5-4~5）。墓壙によっては鉢 2 類（図 5-6）とフィッシュ・プレート（図 5-11）が伴う。

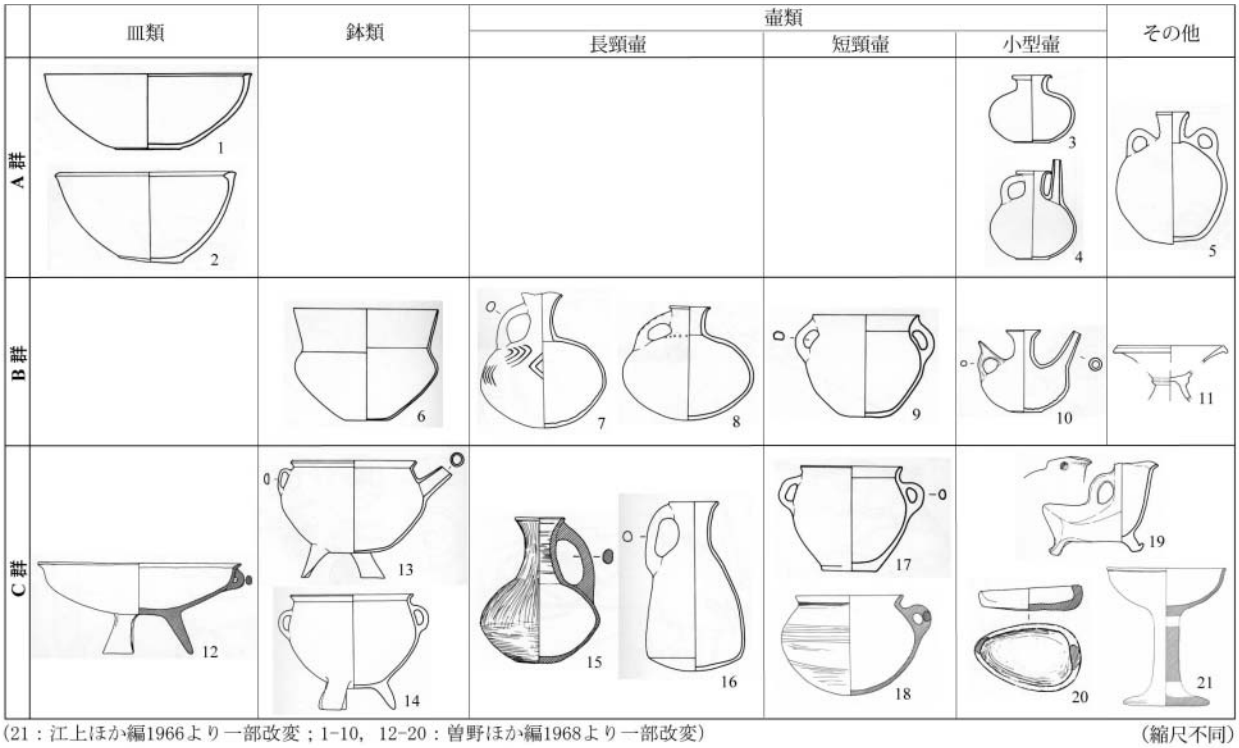
3）C 群

ノールズ・マハレ、ホラムルード、ハッサニ・マハレで共通する組成。鉢類、短頸壺、長頸壺の組み合わせを基本とする。皿類、鉢類すべてに扁平あるいは突起状の脚がつく点が特徴。鉢類は 4 類が主（図 5-13~14）。4 類は最も多くの墓壙から出土するため、この土器群の指標となる。短頸壺は 1 類（図 5-17）に加え、2 類（図 5-18）が多数出土する。長頸壺は 1 類（図 5-15）、2 類、3 類、4 類（図 5-16）からなる。なかでも 1 類が最も多く出土する。次に 4 類が多い。長楕円形の胴部を持つ前者は A 群と共通するが、底部が凸レンズ状になる後者はこの群の特徴といえる。ノールズ・マハレ B 区 VI 号墓においてはこれらすべてが共伴して出土する。

表１　デーラマン諸遺跡の各墓壙における器形分類の共伴関係

遺跡	墓壙	層･人骨	皿1	鉢1	偏壺	小型壺2	鉢2	FP	長頸壺1	短頸壺1	長頸壺4	長頸壺3	鉢4	短頸壺2	長頸壺2	形象	皿2	ランプ	短頸壺3	高台付椀	小型壺1	高杯	鉢3
Ghalekuti I	G9	S6	1			1																	
Ghalekuti I	G9	S7		1		1																	
Ghalekuti II	Tomb 6	S8	1		1	2																	
Ghalekuti II	Tomb 3	S3				1			1														
Ghalekuti II	Tomb 2	S4				1	1	1	1	1													
Ghalekuti II	Tomb 5	S7							1	2													
Hassani Mahale	Tomb 8	S8							1	1		1	1			1							
Noruz Mahale	BVI	床面							3	2	1	1	2	1	1								
Noruz Mahale	BV	床面							2		1												
Hassani Mahale	Tomb 4	S4							1				3	1									
Noruz Mahale	BIV	床面							1				5				1	1					
Noruz Mahale	DII	床面							1				1										
Noruz Mahale	DIII	床面							1				1										
Hassani Mahale	Tomb 5	S9～11								1	2		2						1				
Hassani Mahale	Tomb 6	S5･6									2		2	1									
Noruz Mahale	BII	床面									1		1										
Noruz Mahale	BI	床面										1	1	1									
Noruz Mahale	DIV	床面												2	1								
Noruz Mahale	BVII	床面										1		1									
Noruz Mahale	DI	床面										1		1									
Noruz Mahale	AI	床面										1											
Hassani Mahale	Tomb 3	S3											1										
Noruz Mahale	CI	床面											1										
Khoramrud	AVI	床面											1										
Hassani Mahale	Tomb 1	S1												1									
Hassani Mahale	Tomb 7	S7												2									
Khoramrud	I	床面													1					1			
Ghalekuti I	G9	S8																			1		
Noruz Mahale	AII	床面																				1	
Noruz Mahale	EI	床面																					1

※表中の数字は出土点数を示す



(21：江上ほか編1966より一部改変；1-10，12-20：曽野ほか編1968より一部改変)　(縮尺不同)

図５　鉄器時代 IV 期からパルティア期にかけてのデーラマン地域出土副葬土器組成

3．製作技術の分類

本項では器形以外の属性によってデーラマン地域出土土器の分類を試みた。同様の観点での分類はすでに三宅俊成が試みている。三宅は色調、胎土、ミガキの有無にもとづき、「初期鉄器時代」から「パルティア期」にかけての資料を 4 タイプに分類した（三宅 1976: 298-304）。

本分析では色調、胎土を三宅よりも細分し、ミガキ以外の調整にも着目した。その結果諸属性の相関関係から明赤褐色精製土器、橙色精製土器、赤色精製土器、赤彩精製土器、明赤褐色土器、赤褐色土器、鈍褐色土器、黒褐色磨研土器という 8 タイプに分類することが可能だった。また個々の類型でしかない器形が確認できたので、適宜前項での器形分類に沿って合わせて記載する。

1）明赤褐色精製土器

断面は明赤褐色を呈し混和材はほとんど含まない。器面は胎土と同様の明赤褐色。成形は水びきによる。器面調整は主にナデ。同系色のスリップをほどこす場合もある。この分類には皿 1 類の一部、フィッシュ・プレートがある。

2）橙色精製土器

断面の色調は橙色で、水篩したかのように緻密である。器面も橙色を呈する。成形は水びき、器面調整は主にナデによる。皿 1 類の一部、鉢 2 類が該当する。

3）赤色精製土器

赤色の胎土は水篩したかのように緻密。器面も断面と同様赤色を呈する。成形は水びきによる。調整はミガキあるいはナデ。ミガキは暗文状になる場合が多い。この工程による器形としては小型壺 2 類が挙げられる。

4）赤彩精製土器

断面の色調は明赤褐色精製土器に類似する。一方、器面にはスリップがほどこされていてより赤色となる。ほとんどは水びきによる成形。器面はナデにより軽く滑らかにした後、スリップと、さらにミガキがほどこされる場合もある。この工程が確認できる器形は皿 1 類や小型壺 2 類。

5）明赤褐色土器

断面の色調は明褐色精製土器と同様だが、この類型では 0.5 から 1　程度の砂粒をやや多く含む。器面は内外面ともに明赤褐色から橙色を呈する。成形は環積みが主で、器面はミガキやナデをほどこしている場合が多い。小型壺 1 類や長頸壺 2 類、鉢 4 類でみられる工程。

6）赤褐色土器

断面の色調は赤褐色。若干の砂粒を含む。器面の色調は胎土と同様、内外面ともに赤褐色を呈する。環積みによる成形が多く、器面調整はミガキとナデが主。長頸壺 3 類の一部のみ、該当する。

7）鈍褐色土器

断面は鈍褐色あるいは灰褐色を呈する。0.5 ～ 1.5mm の黒色、褐色、灰色の砂粒を多く含み、やや粗な印象をうける。器面の色調も鈍褐色、鈍赤褐色。成形は環積みによる。器面調整はナデが主となる。一部口縁部や把手などにミガキがほどこされる場合もある。鉢 1 類、3 類、4 類、短頸壺 1 類、ランプ形土器でこの工程が確認できる。

8）黒褐色磨研土器

断面の色調は赤褐色や暗赤褐色、灰褐色。0.5 ～ 1mm の黒色あるいは褐色の砂粒を含むが上記鈍褐色土器よりは緻密である。器面は黒褐色を呈する。成形は環積みによる。器面調整で細かいミガキを多用する点が特徴。内面にはナデやケズリが部分的に用いられる場合もある。鉢 4 類、短頸壺 2 類と 3 類、長頸壺 1 類、2 類、3 類、4 類が該当する。

4．製作技術からみた土器群の抽出と、器形から導いた土器群との比較

製作技術については実見した土器に限り判断したので、共伴関係が実情を反映している蓋然性は器形のそれに比べると低いのかもしれない。その限りだが墓壙間で比較してみると、一定の傾向を見出すことができる（表 2）。

まず、赤色精製土器、赤彩精製土器、橙色精製土器を副葬するガレクティ I 号丘 9 号墓 6 号人骨と II 号丘 6 号墓（I 群）。対してガレクティ I 号丘 9 号丘 7 号人骨とガレクティ II 号丘 2 号墓では、そうした明赤褐色系精製土器に鈍褐色土器と黒褐色磨研土器がそれぞれ伴う（II 群）。ガレクティ II 号丘 5 号墓とノールズ・マハレ BIV、BVI、EI 号の各墓壙では鈍褐色土器と黒褐色磨研土器のみとなる（III 群）。さらにハッサニ・マハレのすべての墓壙、ノールズ・マハレ BI、BII、CI、DIII、DIV の各墓壙では黒褐色磨研土器にほぼ限られる（IV 群）。一方、明褐色土器あるいは褐色土器からなる一群もある（V 群）。前者はガレクティ I 号丘 9 号墓 8 号人骨とホラムルードの各墓、後者はノールズ・マハレ AI 号墓､DI 号墓にそれぞれ限られる。

このようにみてみると、大きくは精製土器を伴うガレクティ I 号丘と II 号丘の各墓壙（I 群と II 群）、精製土器は伴わず、暗色系の土器が主になるホラムルード、ノールズ・マハレ、ハッサニ・マハレの各墓壙（III 群と IV 群）というように大別されよう。前者に副葬される精製土器は橙色精製土器や赤色精製土器、赤彩精製土器を主として、

表 2　デーラマン地域の諸遺跡における製作技術分類の共伴関係

遺跡	墓壙	層・人骨	赤色精製土器	赤彩精製土器	橙色精製土器	明赤褐色精製土器	鈍褐色土器	黒褐色磨研土器	明赤褐色土器	赤褐色土器	器形による土器群
Ghalekuti I	G9	S6	1		1	I群					A
Ghalekuti II	Tomb 6	S8	1	1							A
Ghalekuti I	G9	S7	1				1		II群		A
Ghalekuti II	Tomb 2	S4			1	1	1	2			B
Ghalekuti II	Tomb 5	S7					2	1			B
Noruz Mahale	EI	床面					1		III群		-
Noruz Mahale	BIV	床面					3	3			C
Noruz Mahale	BVI	床面					1	2			C
Noruz Mahale	CI	床面						1	IV群		C
Noruz Mahale	DIII	床面						1			C
Noruz Mahale	DIV	床面						3			C
Noruz Mahale	BI	床面						2			C
Noruz Mahale	BII	床面						2			C
Hassani Mahale	Tomb 1	S1						1			C
Hassani Mahale	Tomb 3	S3						1			C
Hassani Mahale	Tomb 4	S4						4			C
Hassani Mahale	Tomb 5	S9～11						3			C
Hassani Mahale	Tomb 6	S5･6						2			C
Hassani Mahale	Tomb 8	S8						1			C
Ghalekuti I	G9	S8					V群		1		-
Khoramrud	I	床面							2		C
Khoramrud	AVI	床面							1		C
Noruz Mahale	AI	床面								1	C
Noruz Mahale	DI	床面								1	C

※表中の数字は出土点数を示す

明赤褐色精製土器も加わる。全体に明褐色系を呈する精製土器群である。器面は回転台によるナデやスリップによって極めて平滑になる。対して後者はほぼ黒褐色磨研土器に限られる。全体に暗褐色系、光沢を伴うミガキが多用される点も前者とは大きく異なっている。

この製作技法から導いたまとまりと器形から導いた土器群との対応関係をみてみると、A 群は主に I 群、加えて II 群から構成される。II 群の場合でも黒褐色磨研土器を共伴することはないようだ。B 群は II 群と III 群からなる。C 群は大部分が IV 群に対応する。加えて III 群と V 群の場合も少例ながらある。

5．編年

1）相対編年－土器群間での比較－

前章で示した 3 つの土器群のなかで、複数に共通する器形が存在する。そうした器形の共有関係から土器群の相互関係を考えてみたい。

まず、A 群と B 群では精製の小型壺（小型壺 2 類）が共通する。B 群と C 群では長頸壺 1 類と短頸壺 1 類が共通する。特に後者は双方で主要な器形になっている。一方、三つの土器群すべてに存在する器形はない。こうした類似性をもとに相対的な位置付けを考えると A、B、C あるいは C、B、A という順が想定できる。同時に、これら土器群は時期的にかけ離れてはいないということもいえよう。

この相互関係は製作技術からも支持される。A 群と B 群にはともに赤色あるいは明赤褐色系の精製土器がある。B 群は同時に、少数ながら黒褐色磨研土器もともなう。そしてこれは C 群において大部分を占める類型となっている。ここでも土器群すべてに共通する要素はないけれども、A 群と B 群、B 群と C 群それぞれについて相互関係が指摘できる。器形と製作技術はある程度対応し合っているから、当然の帰結ともいえる。

一方、前時期の鉄器時代 III 期と今回導いた土器群に共通する器形というのは現時点では指摘できない。しかしおおまかな器種組成からみたばあい、III 期で皿類が主要な器種となる点（有松 2007: 93）は A 群の傾向とおおまかに一致する。ただし、鉄器時代 III 期に特徴的だった刻文（有松 2007: 図 6-25, 26, 29）や口縁部外面を面取りし、口縁部断面が三角形を呈するようになる皿類（有松 2007: 図 6-24, 25）は A 群や B 群にはないし、共伴することもない。同様のことは製作技術からも言える。鉄器時代 III 期には精製土器のなかでも明赤褐色系の精製土器が過半を占める（有松 2007: 図 3, 93）。今回抽出したなかでは明赤褐色精製土器と橙色精製土器に類するものである。系統関係の有無

は不明だが、これらは上述したように製作技術からみた場合のⅠ群とⅡ群、器形分類ではＡ群とＢ群にしか存在しない。こうした点を重視すれば、Ａ群とＢ群はＣ群よりも鉄器時代Ⅲ期に近い時期にあると想定できる。

２）時期比定①－他地域出土土器との比較－

他地域との比較を通して分類した土器群の年代を推定してみたい。まずＡ群とＢ群に関しては鉢２類、偏壺、フィッシュ・プレートについて南西イランに類例が指摘できる。特にペルセポリス、パサルガダエ、スサでこれらに類似する器形が出土している。偏壺はペルセポリスとパサルガダエ双方に類例がみられる（Schmidt 1954: PLATE 72-12, 13, PLATE 73-2; Stronach 1978: Fig. 115）。鉢２類は全体に深め、胴部下半が若干膨らみ、底部もやや狭い。この類例はパサルガダエにみられる（Stronach 1978: Fig. 106-1~3）。フィッシュ・プレートも同様にパサルガダエ及びスサから多く出土している（Stronach 1978: Fig. 108-15~23, Fig. 112-14; Boucharlat 1987: Fig. 63; Miroschedji 1987: Fig. 19）。

対して、Ｃ群については年代が明確な周辺地域との比較が容易ではない。セフィード・ルード川東岸に位置するハリメジャーン地域のシャーピール（Shah Pir）及びシマーン（Shiman）でのみ、Ｃ群に特徴的な鉢４類が出土している（深井・松谷編 1980: PL. 38-6, 39-1, 2）。この点についてはハーリンクの指摘（Haerinck 1983: 149-164）以上の比較を行うことは困難だった。

３）時期比定②－放射性炭素年代－

東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室にて、Ｃ群に属するハッサニ・マハレについて放射性炭素年代の測定を行った。具体的にはハッサニ・マハレの４号墓と５号墓それぞれの鉢４類に埋納された炭化穀物を AMS 法で測定した。前者（TKa-13841）は 2090 ± 30BP、後者（TKa-13839）は 1880 ± 30BP という年代が出されている。いずれもパルティア期に相当する。

４）まとめ

Ａ群とＢ群については他地域と比較しうる器形が複数存在した。偏壺、竜骨部のある鉢（鉢２類）、フィッシュ・プレートといった器形である。重要なのは、これらはパサルガダエ、ペルセポリス、スサといったイラン南西部の各遺跡でポスト・アケメネス朝期あるいはセレウコス朝期に年代付けられているという点である。特にフィッシュ・プレートはセレウコス朝期の指標として注目されている（Stronach 1978; Haerinck 1983; 足立 2007）。こうしたことからＡ群およびＢ群が鉄器時代Ⅳ期に該当することは確実だろう。さらにフィッシュ・プレートの存在を重視すれば、Ｂ群はなかでもポスト・アケメネス朝期に近い年代が想定できよう。

Ｃ群はハッサニ・マハレ４号墓と５号墓の放射性炭素年代からパルティア期に該当すると推測できる。このことは器形の比較からＣ群がＢ群の後の時期に位置付けられると推測したこととも矛盾しない。よって、この土器群をパルティア並行期とすることについては正鵠を得ていると判断される。

以上のように他地域や前時期と比較した限りでは、Ａ群とＢ群はともに鉄器時代Ⅳ期と同じ時期区分におさまることになる。一方で器形や製作技術からみた場合、両者には上述したような若干の相違も指摘できる。それを重視するならば、Ｂ群のほうがＣ群に近く、やや新しい時期に相当することになる。デーラマン地域において鉄器時代Ⅳ期の細分が可能になるわけである。同様の区分はＣ群、すなわちパルティア期についてもいえるかもしれない。Ｃ群は製作技術による分類のうちⅢ群、Ⅳ群、Ⅴ群からなる。特に前者二つと後者の相違は明瞭で、恣意的な要因が想定できよう。

最後に小型壺２類について触れておきたい。ガレクティⅠ号丘Ｇ区９号墓の８号人骨に伴って副葬された小型壺２類は共伴する他の器形もなく、上記土器群のいずれに含まれるのか、別の土器群が存在するのか判断することはできない（表 1）。製作技術ではⅤ群に分類したが、では他のⅤ群の土器群を含むＣ群と同様パルティア期に位置付けられるかといえば、そうともいえない。そこからの位置付けも困難だった。また鉄器時代Ⅲ期以前の土器群にも類例は認められない。ただしこの土器はガレクティⅠ号丘９号墓８号人骨にともなっている。これより上層の６号及び７号人骨に伴う土器はＡ群である。このことを重視すれば、小型壺２類は鉄器時代Ⅳ期以前且つ、Ⅳ期だとしても相対的に古く、アケメネス朝期に近い時期に年代づけられるのかもしれない。

Ⅴ．デーラマン地域における鉄器時代Ⅳ期からパルティア期にかけての副葬土器の時期区分

１．デーラマン地域における鉄器時代Ⅳ期からパルティア期にかけての副葬土器の概要

１）鉄器時代Ⅳ期？

ガレクティⅠ号丘Ｇ区９号墓の８号人骨に伴うやや粗製の小型壺は鉄器時代Ⅳ期、特にアケメネス朝ペルシャ並行期に該当する可能性がある。ただしこの時期比定についてはさらなる分析が必要なため、稿を改めたい。

2）鉄器時代IV期

この時期に該当する資料としてはまず、ガレクティI号丘G区9号墓6号人骨及び7号人骨に伴う土器と、ガレクティII号丘6号墓副葬土器がある。皿類、鉢類と小型壺が特徴的な器形で、皿類および鉢類は口唇部の突出する。また小型壺は胴部がやや長楕円形になる。ともに器壁が薄く、一定の厚さを保つ。全体に均整のとれた器形である。高速の回転台あるいは水びきによって成形されたと考えられる。全般に水簸したかのような精緻な胎土を用いて、断面、器面ともに赤色や明赤褐色、橙色を呈する。特に赤色系の一群は器面も非常に平滑、胎土と同系色のスリップをほどこしている場合もあった。例外的なのはガレクティII号丘6号墓から検出された偏壺である。実見が叶わず詳細は不明だが、イラン南西部と比較可能な資料として貴重だろう。この器形の比定をより厳密にすることで、この墓壙や土器群の年代が変化することもあり得る。

さらにガレクティII号丘2号墓、3号墓、5号墓も同時期に相当する。これらの墓壙では主に精製の小型壺、胴部長楕円形の長頸壺、双把手付の短頸壺が副葬されていた。後二者はそれぞれ黒褐色磨研土器と鈍褐色系のやや粗製の土器に相当する。特に黒褐色磨研土器が共伴すること、南西イランと比較可能な竜骨部のある鉢やフィッシュ・プレートといった器形がみられることから、上述したガレクティI号丘の埋葬址とこれら墓壙は区別してとらえた。後者のほうがやや新しい時期に相当すると考えられる。そうしたなかガレクティII号丘6号墓は片やI号丘埋葬址と類似する鉢があり、片や偏壺も出土する。両土器群の特性を備えているととらえられよう。そうした墓壙の存在を重視すれば、両者は時期差があったにしてもかけ離れてはいなかったようだ。

3）パルティア期

ハッサニ・マハレ、ノールズ・マハレ、ホラムルードの各墓はパルティア期に比定した。これら遺跡から出土する副葬土器の皿類や鉢類にはことごとく、扁平あるいは突起状の三脚がつく。また壺類では胴部長楕円形の長頸壺に加え、底部が凸レンズ状あるいは胴部洋梨形のものが多く出土する。こうした土器の器面は概して暗色系で、磨研がほどこされている。ミガキは単位が細かく光沢をともなう。前時期と比較して器形、製作技術ともにおおきく変化するといえよう。同時に製作技術の斉一性が高まる点も特徴になる。前時期には一墓壙に副葬される組成中にも複数の製作技術が指摘できた。さらにそれぞれが特定の器形に対応していた。対して当該期は器種問わず黒褐色磨研土器が多数を占める。だからこそ褐色土器や明褐色土器が副葬されるノールズ・マハレの一部とホラムルードの墓壙については、時期差や系統の相異を想定すべきなのかもしれない。

2．既出編年案との比較（図3）

デーラマン地域の墓から出土する土器を器形によって分類し、墓壙内での共伴関係からそれらの同時性を導いた。その結果おおきく三つの土器群を導くことが出来た。この墓壙内での組成の差異をそのまま時期差と捉え得るか判断するために、本稿では複数の要素から検証を試みた。具体的には土器群の組成及び型式、製作技術による比較、年代が明確になっている他地域の資料との比較、放射性炭素年代の測定をおこなった。それらについて別個に検証したところ、その結果は相互に矛盾することなく同様の傾向を示したといえよう。いずれも複数の土器群が完全に同時期とする根拠とはならず、むしろ逆の傾向が指摘できる。そうしたことから抽出した副葬土器組成の差異を、おもに時期差によるものと判断した。

具体的にはまず、ガレクティI号丘G区9号墓及びガレクティII号丘の各墓について鉄器時代IV期、とりわけポスト・アケメネス朝期に該当する可能性を示した。こうした墓は従来、「アケメネス朝期」（三宅 1976; Hori 1981）あるいは「パルティア期」とされてきた（Hori 1981）。「鉄器時代IV期」に位置付けたハーリンクも上述したように、実質的にはアケメネス朝並行期に比定してきたわけである（Haerinck 1989）。ガレクティII号丘の各墓については先行研究の中で唯一堀が本稿でのポスト・アケメネス朝期も含まれる年代幅のなかに位置付けてはいるものの、パルティア期との分離は図っていない（Hori 1981）。

本稿ではさらにこれらをガレクティI号丘9号墓上層とガレクティII号丘の各墓というように区分してとらえた。この点も堀の見解と一致する。ただし堀は時期区分の際に金属製品に比重を置き、より北方の草原地帯との比較を基に編年を行っている。土器を中心とした分析及び南西イランとの比較を重視した本研究とは、上述したように年代比定に若干差異が生じる結果となった。

本稿で提示した放射性炭素年代によるならば、ハッサニ・マハレ、ノールズ・マハレ、ホラムルードの各墓壙から出土する三足付土器群はパルティア期全般に及ぶことになる。そのなかでハッサニ・マハレ4号墓の副葬土器はハーリンクの型式分類によれば「パルティア後期」ということになる。現にハーリンクはこの墓を含むハッサニ・マハレを「パルティア後期」と位置付けている（Haerinck 1983: 12, 149-164）。しかし測定の結果、この土器についてはパルティア期初頭の年代が示された。これはハーリンクの「パルティア前期」に相当する。

また今回の分析でデーラマン地域においても鉄器時代IV期相当の土器群が抽出できたことから、ハーリンクの

「パルティア期」の定義に沿って三足付土器群をセレウコス朝並行期にまで遡らせること自体についても検討の余地があろう。この土器群がパルティア期全般に及ぶ時期幅をもっていたのか、そうでないとすればパルティア期のどの時期に限定されるのかといった点についてはさらなる精査が必要だが、それは同時にハーリンクの時期区分について検証することにつながるかもしれない。

Ⅵ. おわりに

未報告資料も含めてデーラマン地域の土器編年を再検討した結果、ガレクティ I 号丘 G 区 9 号墓上層とガレクティ II 号丘の各墓壙について新たな区分と編年案を提示した。また、ハッサニ・マハレ、ノールズ・マハレ、ホラムルードの各墓に関してはおおむねパルティア時代に属すという既存の編年を追認することになったが、それについても放射性炭素年代という新たな根拠を提示することができた。

同時に副葬土器について器形および製作技術を細分のうえ、再整理することができた。デーラマン地域は従来、上記三足付土器群の特異性からこの時期、周囲から孤立した特殊な地域として位置付けられてきた（Haerinck 1983: 253）。それゆえ前後の時期や近隣地域との関係、そうした土器を有した背景についての検証は不十分だったといえよう。今後、本稿で整理した時期区分と副葬土器の様相をもとに、アケメネス朝並行期、ポスト・アケメネス朝期、パルティア期それぞれにおける当該地域の位置付け、地域社会の具体的様相を明らかにしていきたい。

謝辞

東京大学総合研究博物館所蔵資料についての実見と発表の許可、年代測定は西秋良宏先生に便宜を図っていただきました。西秋先生には本稿作製に際してもご助言いただきました。記して謝意を表します。

参考文献

足立拓朗　2003「パルティア精製土器にみるヘレニズム時代の地域性」『第 10 回　ヘレニズム～イスラーム考古学研究　発表要旨集』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会。

足立拓朗　2007「アケメネス朝期後のイラン土器編年の問題について」学会設立十周年記念連続シンポジウム「西アジア考古学の編年：日本考古学調査団からのアプローチ（I）ーヘレニズム時代～イスラーム時代ー」配布資料。

有松唯　2005「鉄器時代からパルティア時代にかけてのイラン、デーラマン地域の土器編年」『日本西アジア考古学会　第 10 回総会・大会要旨集』34-38 頁。

有松唯　2007「イラン、カスピ海南西岸域における鉄器時代文化の地域性とその変化ー土器分析を中心にー」『西アジア考古学』8 号　87-102 頁。

江上波夫・深井晋司・増田精一編　1966『デーラマン II　ノールズ・マハレ、ホラムルードの発掘　一九六四』東京大学東洋文化研究所。

曽野寿彦・深井晋司編　1968『デーラマン III　ハッサニ・マハレ、ガレクティの発掘　一九六四』東京大学東洋文化研究所。

谷一尚　1997「ハッサニ・マハレ、ガレクティ編年の再整理と発掘の意義」『精神のエクスペディシオン』150-156 頁　東京大学出版会。

西秋良宏・三國博子・小川やよい・有松唯　2006『東京大学総合研究博物館　考古美術（西アジア）部門所蔵考古資料目録　第 7 部　イラン、デーラマン古墓の土器』東京大学総合研究博物館。

深井晋司・池田次郎編　1971『デーラマン IV　ガレクティ第 I 号丘、第 II 号丘の発掘　一九六四』東京大学東洋文化研究所。

深井晋司・松谷敏雄編　1980『ハリメジャン I ーシャー・ピールの発掘ー』東京大学東洋文化研究所。

三宅俊成　1976「デーラマン古墓出土の土器の考察」『江上波夫教授古稀記念論集　考古・美術篇』297-329 頁　山川出版社。

Adachi, T. 2005 Considering the Regional Differences in the Parthian Fine Pottery. *Al-Rafidan* 26: 25-36.

Boucharlat, R. 1987 Les niveaux post-Achéménides à Susa, secteur nord. *Cahiers de la délégation archéologique Française en Iran* 15: 145-326.

Boucharlat, R. 2005 Iran. In P. Briant and R. Boucharlat (eds.), *Archéologie de l'empire achéménide (Persika 6)*, 221-292. Paris, De Boccard.

Haerinck, E. 1983 *La Céramique en Iran pendant la Période Parthe (ca. 250 av. J.C. à ca. 225 apr s J.C.): Typologie, Chronologie et Distribution*. Leuven, Imprimerie Orientaliste.

Haerinck, E. 1989 The Achaemenid (Iron Age IV) Period in Gilan, Iran. In L. De Meyer and E. Haerinck (eds.), *Archaeologia Iranica et Orientalis. Miscellanea in Honorem Louis Vanden Berghe*, 455-474. Gent, Peeters Press.

Hori, A. 1981 Dailaman and Halimehjan- Re-examinations of their chronologies-. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 3: 43-61.

Miroschedegji, P. 1987 Fouilles du chantier ville royale II a Suse (1975-1977). *Cahiers de la délégation archéologique Française en Iran* 15: 145-326.

Schmidt, F. E. 1954 *Persepolis II: Contents of the Treasury and Other Discoveries*. Chicago, The University of Chicago Press.

Stronach, D. 1978 *Pasargadae: A Report on the Excavations Conduced by the British Institute of Persian Studies from 1961 to 1963*. Oxford, Clarendon Press.

有松　唯

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員（DC2）

Yui ARIMATSU

Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo/

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science